



◎昭和女子商業学校として開校。建学の精神「明敏謙讓」を校訓として、「明朗にして健康で、自主性に富み、謙虚で個性豊かな人間」の育成を実践。文化系・運動系ともに全国レベルで活躍する部活動が多く、日本代表として世界大会に出場する選手も輩出している。

設立	1940(昭和15)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約400人
2016年度入試合格実績(現浪計)	<p>国公立大は、茨城大、宇都宮大、千葉大、千葉保健医療大に6人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、中央大、津田塾大、東京女子大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、早稲田大、立命館大などに延べ604人が合格。</p>
住所	〒272-0823 千葉県市川市東菅野2-17-1
電話	047-323-4171
Web Site	http://www.showa-gkn.ed.jp/js/

千葉県・私立
昭和学院中学校・高校

進学実績向上

英語の指導を軸に、 難関私立大学の 合格実績向上を図る

変革のステップ

背景

◎2003年度に女子校から共学校に移行したが、入学生の学力低下が目立つようになる

STEP 1

実践

◎中学校1年生から英語を軸とした学習指導と、高い志を持たせる進路指導を徹底。模試の結果を教師間で共有し、ぶれない指導を実現

STEP 2

成果

◎推薦入試に頼らず、一般入試に挑戦する生徒が増加。16年度入試でGMARCHの合格者数が過去最高に

STEP 3

共学化を機に、学習指導と
進路指導の課題が浮き彫りに

昭和学院中学校・高校は、千葉県市川市に位置する私立の共学校だ。水泳や新体操、バスケットボールなど全国レベルの部活動を擁し、オリンピック出場選手も輩出してきた。近年は、毎年2桁の難関大学合格者数を出し、文武両道の進学校としての評価を確立しつつある。

同校が、開校以来守り続けてきた女子教育から、共学教育に移行したのは2003年度のこと。女子校人気の陰りから志願者数が減少し、1学年最大17学級だった学校規模は6学級にまで縮小していた。志願者数の確保が共学化の目的だったが、当初は学力の低い生徒が少なからずいた。そのため、生徒数を増やすと同時に、指導の質も高めていかなければならないという危機感が、教師間で共有されるまでに時間はかからなかった。

転機となったのは、共学化2年目の04年度。高校中心に指導してきた英語科の山崎直子先生が中学校1学年主任となり、特進クラスを中心に指導のてこ入れが図られた。

「女子校時代から特進クラスはありましたが、部活動の有力選手が多いこともあり、難関大学を目指すという意識は定着しませんでした。スポーツ推薦入試などで難関大学に合格することはあっても、継続的に実績を上げ

することはできず、特進クラスの位置づけそのものを変える必要がありました」（山崎先生）

コミュニケーションタイプな英語指導で英語力と積極性を育む

04年度、学年主任として山崎先生が掲げた方針は「英語の強化」だった。

「中学校1学年主任、特進クラスの担任として何ができるのかを考えた時、まずは自分の担当教科である英語の学力を上げようと考



山崎直子

やまざき・なおこ

昭和学院中学校・高校
教職歴32年。同校に赴任して33年目。進路指導部長。[Where there's a will, there's a way. 高い志に向かって諦めず努力を続けること]



倉田透

くらた・とる

昭和学院中学校・高校
教職歴23年。同校に赴任して24年目。進路指導部副部長。高校3学年主任。「生徒一人ひとりの意欲を引き出し、応えていきたい」



大橋和也

おはし・かずや

昭和学院中学校・高校
教職歴23年。同校に赴任して24年目。教務副部長。「情熱ある教師として生徒に接し、最後まで諦めない心を持たせたい」



三浦陽祐

みべ・ようすけ

昭和学院中学校・高校
教職歴11年。同校に赴任して12年目。進路指導部副部長。中学校1学年主任。「生徒の可能性を信じ、目標を持って行動できるよう後押しする」

えました。英語は入試の軸となる教科ですし、英語ができれば首都圏の難関私立大学合格への足がかりになります。まずは、英語力を伸ばして、その勢いを他教科に波及させようとしたのです」（山崎先生）

中学校1年生から文法を徹底的に指導し、長文の内容把握や文構造の理解などの力をつけさせた。山崎先生の授業では、単に英文を和訳させるのではなく、「下線部の文章について、なぜ筆者はそう考えたのか」というように、より深く、論理的な文章読解を心がけた。

基礎・基本の徹底と同時に、生徒の主体性や興味・関心を高めるためのコミュニケーション型な授業にもこだわった。英語が好きでなければ学力は伸びないという信念の下、音読やペアワークなど、アウトプットの時間を多く取り、英語を使う楽しさや喜びを味わわせるようにした。

コミュニケーションな授業では、実際のコミュニケーションの場面でも生徒が物怖じしない姿勢を養うこともねらいとしていた。

「厳しい入試を乗り越えるためには、自分から先生に弱点克服の方法を質問したり、課題を求めたりする能動性が必要です。積極的に英語を使うことで、自分の思いを伝え、望むことを実現するための主体性やコミュニケーション能力を鍛えたいと考えました。アイスやノーだけでもいい。授業ではとにかく英語を使い、自分の考えを相手に伝える意識を

持たせるようにしました」（山崎先生）

GTECで4技能をスコアで示し、学習成果を実感させる

英語の成績が上がるにつれて、「努力すれば学力はつく」という自信が生徒の中に芽生え、他教科の学習にも好影響をもたらした。その結果、10年度入試ではGMARCH（*）の合格者数が初めて20人を超え、最難関の私立大学合格者数も合計9人と躍進を遂げた。以降、同校では難関大学の合格者数を毎年2桁出すようになった。実績が上がるにつれて、より学力の高い生徒が入学するようになり、1クラスだった特進クラスは、14年度には3クラス体制とした。より実践的な英語力が求められるようになった。ここ数年は、英語力を測るアセスメントに、GTEC for STUDENTS（以下、GTEC）を活用している。4年前から毎年受験させ、16年度は特進クラスの受験回数を年1回から2回に増やした。4技能ごとの力をスコアで把握でき、継続して受験することで英語力の伸びも実感できるため、生徒のGTEC受験への意欲は高いという。また、英語の外部検定試験のスコアを、入試に活用する大学が増えていることを踏まえ、進路指導に変化が表れているという。

「GTECでのこのスコアは、A大学B学部の入試で〇点取ったのと同じだよ」という

*学習院大学、明治大学、青山学院大学、立教大学、中央大学、法政大学のこと。頭文字を取ってGMARCH。

ように、普段から生徒に声をかけています。生徒も入試とGTECの関連を意識するようになってきました。英語が得意な生徒にとつてはセンター試験よりもチャンスは大きいはず。今後、GTECのさらなる活用を検討していきたいと思います」(山崎先生)

「フレッシュマンキャンプ」で 前向きな進路意識に転換

低学年時からの進路意識の醸成も、共学化2期生の躍進で確立されたノウハウの1つだ。以前は、生徒の志望校の合格可能性を検討し、学力との差がある場合には個別指導を行っていた。進路指導部副部長の倉田透先生はこう語る。

「共学化2期生は、低学年時からGMARCH合格を目標にしてきた学年です。生徒も『これだけ勉強しているのだから志望大学に入りたい、入れるかもしれない』という意識が高かったと思います。低学年時から明確な進路意識を持たせ、その目標に向けてしっかり勉強させれば、GMARCH以上も十分ねらえるという認識を教師が共有できたという意味でも、ターニングポイントになりました」
また、少なからずいる公立高校の併願校として入学した生徒に対しても、入学時から高い進路意識を持たせ、その志を持続させることを重視した。山崎先生はこう説明する。

「頑張つて成績を上げて、いざ入試になると、弱音を吐く生徒もいます。なかなか自信を持ってない生徒に、新たな一歩を踏み出そうとする意欲と、大学入試で志望を実現させるという決意を持たせることが必要でした」

高校1年生の4月に行う「フレッシュマンキャンプ」では、講話やレクリエーション、校歌斉唱などを通して、高校生としてあるべき姿や昭和学院生としての自覚を持たせ、クラスの団結力を育む。山崎先生が行う進路講話は、特進クラスとそれ以外の総合進学クラスで時間を分け、特進クラスの生徒には、先輩たちが頑張る様子とその実績を伝えて、自分たちにもできるのだという思いを抱かせ、「GMARCH以上の合格を目指す」という意識を浸透させる。総合進学クラスの生徒には、日常の授業や予習・復習の大切さを説くという。

教師のぶれない気持ち 生徒の意志を強くする

一般入試に挑戦させるといっても、共学化2期生以来の特進クラスの不文律だ。3年生も半ばを過ぎ、推薦入試やAO入試の合格者が出始めると、特進クラスの生徒から推薦入試を受けたいという者が出てくる。また、保護者がそれを望む場合も少なくない。教務副部長の大橋和也先生は次のように述べる。

「難易度の低い志望校に変えてその大学の推薦入試を受けたいという生徒に対しては、教師が一枚岩となって説得します。努力して積み上げてきた学力があるのだから、そのまましっかり学習して一般入試に挑戦した方が可能性は広がることを、担任だけでなく教科の先生方からも話してもらい、生徒が自信を持って一般入試に向かえるように鼓舞しています」
生徒の気持ちを引き締める上で重要なのは、教師自身がぶれないことだと、倉田先生は語る。

『『今の努力を続けていけば絶対に大丈夫』と太鼓判を押してあげれば、生徒は必ずついて来てくれます。内心は不安だとしても、教師が授業や補習などで熱心に指導すれば、たとえ不合格だったとしても、生徒は力を出し尽くしたと納得して、最終的に自分が選んだ大学に進んでいきます』

ここ数年、特進クラスの生徒が指定校推薦入試を希望することはなくなった。1年生から高い志望を持って頑張ってきたという自負と、一般入試で合格できるという確信を持っているからだ。みんなが高みを目指す「団体戦」の意識が、生徒一人ひとりの気持ちを強くしている。

模試のデータを共有し どの教師も同じ目線でアドバイス

進路意識の向上のために、模試が果たす役割

図 FINE SYSTEM の度数分布・科目間の表

コース・科目	5-6文系		5-7理系		国英英総合		国英理文系		数英理理系		国語計		数学計		英語計		地理・公民計		理科計	
	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差														
受験人数	91	53	91	43	91	43	91	43	91	43	91	43	91	43	91	43	91	43	91	43
学内点	402.9	419.0	281.0	283.6	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7
標準偏差	87.8	89.9	89.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8
平均点(偏差値)	482.2	446.7	477.2	517.2	489.4	489.4	489.4	489.4	489.4	489.4	489.4	489.4	489.4	489.4	489.4	489.4	489.4	489.4	489.4	489.4
偏差値(人数)	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900

進路模試の結果を詳細に分析し、教師の指導改善に生かすとともに、生徒への具体的なアドバイスにも結びつけている。
*学校資料を基に編集部で作成した画面見本

も大きい。模試の前には必ず過去問題を解かせ、各教科の授業で2、3時間かけて解説する。試験は全て万全の対策をしてから臨むものであり、その集大成として大学入試があると、生徒と教師との間で意識が統一されている。

模試の後には、各学年の模試担当の教師が、FINE SYSTEM(*1)を使って各教科・学級の成績、GTZ(*2)の一覧表を作成し、教科会や学年会議で共有する。成績が芳しくなかった教科や学級があれば、教科担任や学級担任に対策を求め、正答率の低かった分野・単元は、教科担任が授業や補習で事後指導をする。

生徒との面談では、FINE SYSTEM

若手教師が語る、指導変革への情熱

チャレンジすることの大切さを伝えていきたい

進路指導部副部長 三部陽祐

本校では11年間、高校での指導を受け持っていましたが、今年初めて中学校の配属となり、中学校1学年主任と学級担任、進路指導部副部長を務めることになりました。これまで高校の担任として1~3年生を持ち上がりで2度、卒業生を送り出しました。高校での経験を踏まえ、中学校1年生から6年間を見据えた指導を展開していくことが、私の役目です。

本校の生徒は素直で、言われたことにはしっかり取り組みますが、それ以上のことはしない受け身な姿勢が課題です。また、失敗を恐れ、自分ができる以上のことをしたがる傾向もあります。しかし、それでは、生徒は、まだ気づいていない自分の能力に気づいたり、人間性を広げたりすることはできません。そこで、学年の目標に「挑戦」を掲げました。自分の枠から飛び出す勇気を与え、チャレンジして失敗するのはあたり前で、失敗から学ぶという姿勢そのものが大切なのだという意識を浸透させていきたいと考えています。

科学技術の発展やグローバル化がますます進むこれからの社会では、他者とコミュニケーションを取りながら既知の事柄を組み合わせて新しいものを創造する力、異なる背景を持つ人とも協働できる力などが求められます。失敗を生かして自分を高め、未知の領域に踏み出していけるような経験を生徒たちにたくさん積ませ、新しい時代を生き抜く力を養いたいと思っています。

のデータを見せながら、「あと〇点取れていればAゾーンになった」「この問題が解けていれば達成できた」など、具体的にアドバイスする。データの共有によって教師間の目線がそろい、どの教師も同じ内容の助言になるため、生徒は安心して学習できるようになったという。進路指導部副部長の三部陽祐先生はこう話す。

「教師がただ頑張れと言っても、生徒は何をどう頑張ればよいのか分かりません。どこを改善すればよいのか、データを基に解説することができず、生徒は解決の具体的な道筋を描くことができません。今は教師がアドバイスをしています。今後は、生徒自身が模試の分析表を参考にして、対策を考えるような自主性を

を養いたいと考えています」

16年5月には「Classi(*3)を導入し、模試の結果から部活動や課外活動まで、学校生活全般の生徒把握の徹底を進めている。

共学化2期生が卒業してから6年。大橋先生が学年主任を務めた15年度卒業生からは、過去最高の67人のGMARCH合格者を出した。今後は、国公立大学の進学実績向上が課題となる。「国公立大学志望者があまり多くないため、個別に対応している状況です。カリキュラムの改編も視野に入れながら、5教科7科目に対応できる指導ノウハウを蓄積し、生徒の幅広い進路希望に対応できる体制を整えていきたいと考えています」(山崎先生)

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。
2013年10月号指導変革の軌跡「石川県・私立北陸学院中学・高校」など
▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

*3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。